



ひめゆり平和記念資料館

資料館だより



伊原第一外科壕で証言する島袋淑子館長 2016年10月28日

第58号
2016.11.30

目次

●追悼 中山良彦氏	1
●資料館トピックス	2
英語版ガイドブック／アニメ「ひめゆり」DVD／7・8月の開館時間を延長／教員のための展示ガイドツアー／教員向け講習会／「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「次世代の平和講話」／具志川中学校で説明員が講話／「小さき平和へのFLAG!」に参加／教員の「島尻地区10年研修」「糸満市初任者研修」に協力／「ウチナージュニアスタディ事業」の平和学習／朗読劇「ひめゆり」を観劇／歴史教育者協議会全国大会で報告	
●コラム 相思樹	6
●写真でふりかえる「ひめゆりの塔」の70年	7
●研究ノート⑩ 引率教師の実像(1)―内田文彦先生	9
●仲宗根政善日記抄(54)	11
●本棚(仲程昌徳)	13
●声	14
●資料館ガイド	15

追悼 中山良彦氏

ひめゆり平和祈念資料館に多大な功績のある中山良彦氏が2016年9月29日、91歳で逝去されました。中山氏は沖縄海洋国際博覧会「沖縄館」のプロデュースを手がけ、旧沖縄県平和祈念資料館の展示を住民の視点で刷新、戦争体験の「証言」を資料として展示する方式を確立されました。当館の建設に当たっては、総合プロデューサーとして、構想の策定から完成まで、中心的な役割を果たされました。

中山良彦氏と資料館

ひめゆり平和祈念財団 前理事長 本村つる

9月30日に中山良彦氏の訃報を受け、お見舞いになかなかた事を悔んだ。

1984年中山氏はひめゆり平和祈念資料館のプロデュースを任せられその活動の途中、ある日平和通りで吐血し、入院加療し、退院時の検査でガンが見つかり再度入院した。入院中も病室にコンピュータを持ち込み仕事を進めていた。そこへ私たち資料委員は病室へ行き指示に従って仕事を進めた。病気は直腸ガンで排泄の時の痛みは死ぬほどだと言っていた。その状態を一冊の冊子にして退院後に配っておられた。病気の苦しさを忘れる術だったのかも知れない。資料館建設は、建築場所その他様々な制約で難渋し、現在地に決定するまで四、五年を要した。ひめゆり同窓会、特に同窓会東京支部ではいつまでも結果が見えない事にしびれをきらしていた。しかし、中山氏は県の指摘に対して事細かに対応していた。沖縄戦研究者、歴史研究者、地質地盤研究者、建築家等ブレインを集め、慎重に仕事を進めた。この仕事を貫徹する自信があったと思う。

中山氏は実際のひめゆりの塔の壕（伊原第三外科壕）が最も大きな現物資料であると考え、資料委員や同窓会員にも壕公開の意義を説明し賛同を得た。しかし県の自然環境保全審議会は反対した。最終的に県知事は資料館建設は許可したが、壕公開は許可しなかった。そこで第二展示室に病院壕のジオラマ、第四展示室に第三外科壕のジオラマを製作した。開館後、証言員となった私たちはその前で自己の体験を証言することになり、参観者は戦時中の陸軍病院の様子をよく理解して下さった。中山氏は、いろいろな制約の中で立派な資料館を建てて下さった恩人である。

中山氏はある時、自動車にぶつかって大怪我をした時があった。皆命が危いと思っていたがそれも克服し、私達は鉄人といって讃えたが、年には勝てなかった。どうぞやさしかった奥様のもとで安らかにやすみ下さい。御冥福をお祈り致します。



開館前、資料館の門札
を掲げる中山良彦氏
1989年6月21日



開館当日、左から中山
良彦氏、仲宗根政善初
代館長、本村つる。
1989年6月23日

資料館トピックス

◆英語版ガイドブック

ひめゆり平和祈念資料館では、英語版ガイドブック『HIMEYURI PEACE MUSEUM The Guidebook』を刊行しました。たくさんの写真や地図を使って、戦時中の学校生活から、沖縄戦の体験、生存者の戦後までをコンパクトにわかりやすく紹介しています。また、元ひめゆり学徒の証言も収録しています。英語圏の方に「ひめゆり」とは何かを理解していただくうえで、このガイドブックが役立つことを願っています。

定 価：1,100 円 (税込)
発行日：2016 年 10 月 21 日
編 集：ひめゆり平和祈念資料館
発 行：ひめゆり平和祈念財団
規 格：21×21 (cm) 68 ページ オールカラー
※通信販売については資料館 (098-997-2100) まで
お問い合わせ下さい。(送料別、国内1部86円)



◆アニメ「ひめゆり」DVD

アニメ「ひめゆり」がDVDになりました。このアニメは、ひめゆり学徒の戦争体験を子どもたちにわかりやすく伝えるために2012年に制作され、資料館のみで上映してきましたが、この度、販売用のDVDを制作しました。アニメ「ひめゆり」は、お子様だけでなく大人の方にも好評です。外国の方にも理解していただけるように、新たに英語の字幕もつけました。

定 価：1,080 円 (税込)
発売日：2016 年 6 月 23 日
製作・著作：ひめゆり平和祈念財団
規 格：DVD 約30分 英語字幕付き
※通信販売も可能です(送料別、国内1枚86円)



◆7・8月の開館時間を延長

当館では今年から初めて夏期開館時間延長を実施しました。通常は、閉館時間は午後5時25分となっておりますが、7月1日から8月31日の2ヵ月間は1時間延長して、閉館を6時25分としました。

この時期は日が長いので、午後5時以降にひめゆりの塔を訪れる方も多く、例年、資料館の窓口にも「もう入館できないのですか」「せっかく来たので少しでも見学できませんか」との問い合わせがありました。今回、試験的に実施したところ、「間に合わないかと思ったので嬉しい」「良かった」との喜びの声をいただきました。来年も夏期開館時間延長を行う予定です。

◆教員のための展示ガイドツアー

7月30日、「教員のための展示ガイドツアー」を開催しました。学校の先生方に当館の展示を知っていただくことを目的に、2014年から開催しているもので、第7回目の今回は、県内外から4人の参加者がありました。

普段、展示説明を行っている説明員が、児童生徒たちの関心が高い展示を中心に、60分程度のガイドツアーを行い、その後、事前学習に活用できる資料の紹介、来館時に利用できる体験メニューのご案内、質疑応答を行いました。

参加者からは、聴覚障がいのある生徒たちに伝えるときの工夫や、平和学習担当教員がすぐに手に取れるコンテンツの重要性、資料館での学習機会の情報発信を強化してほしい、といった意見がよせられました。



教員のための展示ガイドツアー

◆教員向け講習会

8月10日に「ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会」を開催し、小中高の教員（県内5人、県外5人）および平和教育関係者合わせて17人が参加しました。戦争体験講話と展示ガイドツアー、事前事後学習用のワークショップ、意見交換を行い、参加者からは「(島袋館長の)生の証言にショックを受けた」、「じっくり自分で考え学びたくなるように、とてもよく考えられている」、「自分の意見が言いやすく、いろいろな視点で考えることができた」などの感想が寄せられました。

◆「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「次世代の平和講話」

夏休み特別企画として「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」（8月11・13・14日）と「次世代の平和講話」（8月23～28日）を開催しました。

「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」は、新崎昌子証言員、仲里正子証言員、島袋淑子館長が講話を行いました。戦争体験を直接聞ける貴重な機会として、3日間で341人の参加がありました。

また、「次世代の平和講話」は6人の職員（学芸員・説明員）が講話（24日のみアニメ「ひめゆり」の説明員トーク）を行い、6日間で305人が参加しました。当館では昨年4月から予約団体を対象に「次世代の平和講話」をスタートさせていますが、今回初めて一般の来館者を対象に開催しました。両講話会とも、ご家族連れの姿が多く見られ、夏休みを機にひめゆり学徒隊や沖縄戦について知っていただける機会になったようです。



元ひめゆり学徒の戦争体験講話 8月11日

参加者のアンケートには「若い頃に体験した恐ろしい戦争を次世代に語りつづのは大切なことだと思いました。自分には何ができるのだろう…」「体調のこともあり、大変かとは思いますが、毎年できる限りこのイベントを続けてほしいと思います」(戦争体験講話)、「戦争体験者と説明員の"体験"というギャップを映像、地図、語りで、違和感なく聴くことができました」、「自分の子供達に、戦争の事、命の尊さを教えるのは、少し難しい様に思っていたのですが、ここへ来て講話を聞くことで、少しでも何かを感じてくれたかなと思いました」(平和講話)などの感想が寄せられています。



次世代の平和講話 8月23日

◆具志川中学校で説明員が講話

6月15日、うるま市立具志川中学校の平和教育講演会で、説明員の尾鍋拓美が「ひめゆり学徒隊 宮城喜久子さんの戦争体験」と題して講話を行いました。

当館では2015年4月より、証言員にかわって、戦争体験のない職員が講話を行っていますが、原則として資料館内で実施しています。しかし今回は、具志川中学校より職員の講話を聞きたいという依頼をいただき、当館としてもこの機会に試験的にやってみようということになり、特別に実施しました。

当日は全校生徒680人の前で、約50分、宮城喜久子さんの戦争体験と、戦後の気持ち、ひめゆり資料館がどのようにしてできたのかなどを写真や地図を見せながらお話し、宮城さんの証言映像も上映しました。生徒たちは暑い中でも真剣な表情で話を聞いていました。感想には「実際にひめゆりの塔に行ったり、戦争を体験した人から話を聞いたりして、自分なりにその情報を伝えていきたい」という心強いものもありました。



具志川中学校 平和教育講演会

◆「小さき平和へのFLAG！」に参加

6月19日、東京で開かれた「小さき平和へのFLAG」に、説明員の仲田晃子がオブザーバーとして参加しました。同イベントは、東京大学附属中等学校6年(高校3年)生の石井純さんが、東京近郊の中高校生に沖縄戦を伝えることを目的としたもので、卒業研究の一環として企画されました。中高校生58名、オブザーバー35名の参加がありました。

沖縄でディスカッションを中心とした平和学習コンテンツの提供を行っている、株式会社がちゆんの皆さんによる意見交換のグループワーク、沖縄戦を知ることテーマにした新作の短編映画の上映などによって、参加者に沖縄戦を知る意義について考えてもらう内容でした。若い世代による新しい手法の学びの在り方について、知る機会となりました。

◆教員の「島尻地区 10 年研修」「糸満市初任者研修」に協力

7月29日、「島尻地区10年研修」に協力し、島袋淑子館長の戦争体験講話と職員による展示ガイドツアーを行いました。沖縄県島尻地区の小中学校の中堅教員36人が参加。参加者からは「当時の生徒もおしゃれに気をつけていたと知り、今の子どもたちと変わらない身近な存在に感じた」などの感想がありました。

8月19日には、「糸満市初任者研修」に協力し、1日かけて「教員向け講習会」のプログラムを行いました。糸満市内の小中学校の教員13人が参加し、「講話を聞いて胸に響いた。教育の怖さも知ることができた」などの感想がありました。



糸満市初任者研修 8月19日

◆「ウチナージュニアスタディ事業」の平和学習

8月4日、沖縄県知事公室交流推進課主催の「ウチナージュニアスタディ事業」の一環として、沖縄県からの海外移住者子弟など44人（海外21、県内21、県外2）が当館を訪れ、「平和学習」を行いました。

参加者は展示室で証言員の話の聞いたり、アニメ「ひめゆり」を見たりした後、ワークショップを通して、お互いの気持ちや考えを語り合い、異なる意見を尊重することの大切さを実感したようです。



証言員の話の聞く参加者

◆朗読劇「ひめゆり」を観劇

8月4日、新国立劇場演劇研修所で上演された朗読劇「ひめゆり」を、館長及び職員2名が観劇しました。この朗読劇「ひめゆり」は、ひめゆり学徒隊の引率教師である西平英夫、仲宗根政善、生徒の宮良ルリらの手記をもとにして脚本が制作されたものです。当館では非体験者である職員が、戦争をどのように表現し伝えていくかということが課題となっていますが、同じ非体験者である制作スタッフや役者の研修生たちが、ひめゆり学徒隊の戦争体験をどのように表現するのか参考にすることが目的でした。

感情をこめて朗読するだけでなく、照明や効果音、当時実際に歌っていた歌や、動きなどの演出によって、当時の具体的なイメージが立ち現れ、見ている人たちの想像力をふくらませる効果がありました。また、出演者が「自分がその人物だったならば」ということを懸命に考え想像しながら発するセリフは、観る人の心に強く響くのだと感じ、当館で伝えていくヒントとなりました。

◆歴史教育者協議会全国大会で報告

8月6日、琉球大学を会場に行われた「歴史教育者協議会第68回沖縄大会」の、「地域に学ぶ集い」において、説明員が、「ひめゆり平和祈念資料館「次世代の平和講話」のこころみ—この場で、どのように伝えるのか—」と題して、平和講話の取り組みについて報告しました。当館の発表には、教職員を中心に約30名の参加者がありました。

まず、尾鍋拓美が、当館で主に修学旅行団体向けに行っている「次世代の平和講話」を実際に行い、仲田晃子が、「次世代の平和講話」の内容を作る過程と実践して1年で見てきたことの報告を行いました。

参加者からは、「体験者がどんな気持ちで過ごしてきたかという話は、出来事の美化に対抗しようという点で大事な話だと感じた」、「私たちも体験継承の課題に取り組んでいるが励まされた」、「証言をインターネットに上げてもらえないか」などの意見が出されました。



「地域に学ぶ集い」で報告

相思樹

引率した先生たちの姿

学芸員 前泊克美



ひめゆり学徒隊には十八人の引率教師がいました。「ひめゆり学徒隊」というと主体は生徒たちであり、教師の姿はあまり見えてこないのが一般的だと思います。

教師たちは、戦場の様々な場面で生徒を見守り続けました。しかし、悪化する戦況の中で、精神的、肉体的に追いつめられていきます。島の最南端の海岸にたどり着き未来に絶望した人もいたかもしれぬし、疎開した家族のことを思い生きて帰りたいと願った人もいたかもしれません。きつと複雑な思いを抱えて亡くなっていたことでしょう。

「引率教師たち」展の準備を通して個人の状況が見えてきたことで、ようやく、一人ひとりの心情が想像できるようになりました。さらに、戦後、教師のご家族のなかには、父（祖父）は戦場で生徒を死なせてしまったのだと悩んだり、一家の大黒柱を失ったことによる経済的、精神的な負担を強いられた方もいらっしやると聞きました。

最近、亡くなった教師を郷里の偉人としてとりあげ、顕彰しようとする動きがあるようです。しかし、戦前から戦中の教師の行動、そして戦後のご家族の気持ちを考えるにつけ、教師が美談的に取り上げられるのは事実には即していないし、戦場での本当の姿を知ってほしいと思います。

本当はみんな生きてかった、将来に希望を持っていた、と生存者はそう言います。「みんな」とは決して生徒だけを指すのではないはず。

❖ 写真でふりかえる「ひめゆりの塔」の70年 ❖

今年4月、「ひめゆりの塔」の建立から70年が経ちました。

沖縄戦で亡くなったひめゆり学徒と教師の慰霊碑「ひめゆりの塔」は、1946年4月5日の建立以来、十字架の納骨堂の建設、乙女像の設置、1957年の新しい「ひめゆりの塔」の建立、2009年のリニューアルなど、何度か大きく形を変えてきました。

この機会に、6月1日から9月30日まで当館のロビーで「写真でふりかえる『ひめゆりの塔』の70年」を展示しました。



①最初の「ひめゆりの塔」【1946年～1948年】

1946年4月5日、「ひめゆりの塔」の文字が刻まれた慰霊碑が、真和志村民の手で、伊原第三外科壕の上に建立された。4月7日、「ひめゆりの塔」除幕式と第1回慰霊祭が行われ、仲宗根政善氏が「いは(わ)まくらかたくもあらむ やすらかに ねむれとぞいのる まなびのともは」の歌を捧げた。



②「いは(わ)まくら」の歌碑と刻銘碑【1946年～1948年】

その後、真和志村民によって「いは(わ)まくら」の歌を刻んだ碑(写真右・1946年4月15日建立)、戦死した生徒・教師の名を刻んだ刻銘碑(写真中央・1947年秋建立)が「ひめゆりの塔」の隣に立てられた。



③十字架の「ひめゆりの塔」【1948年～1951年】

1948年、沖縄キリスト教青年部により納骨堂が建設され、遺骨が収められた。最初の「ひめゆりの塔」は納骨堂の正面に入れられ、上部には十字架が立てられた。



④第5回慰霊祭【1950年6月21日】

戦後しばらくは、各地に通行禁止区域があり、交通手段もとぼしかった。1950年に本格的なバスの運行が始まるなど、戦後の混乱が一段落した頃から、元ひめゆり学徒の参列者が増えていった。



⑤鳥居の立つ「ひめゆりの塔」【1951年ごろ】

1950年頃から「ひめゆりの塔」の前に、追悼の歌や「参拝記念」の木札が立ち並ぶようになった。また、恩納村瀬良垣青年会によって鳥居が立てられた。



⑥整備された「ひめゆりの塔」前【1951年】

1951年、日系二世(読谷村)の儀間真一氏の寄付と尽力により、ひめゆり同窓会が「ひめゆりの塔」の敷地を購入し、境界を塀で囲むなどの整備を行った。



⑦現在の「ひめゆりの塔」前【2014年】



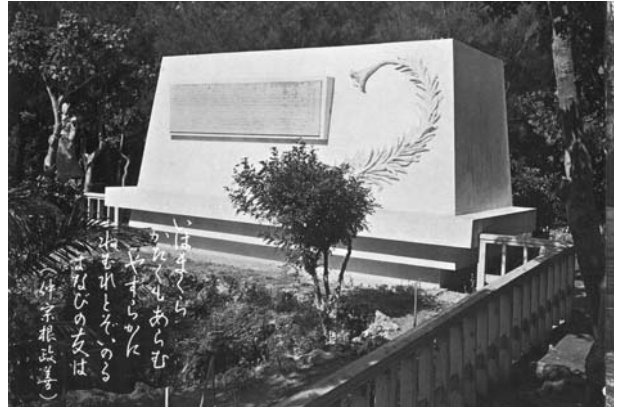
⑧乙女像の「ひめゆりの塔」【1951年6月～10月】

1951年6月、納骨堂の上部に、玉那覇正吉氏制作の「乙女像」(立像)が設置された。その横に座像を設置する予定だったが、10月のルース台風で立像が倒壊し、実現しなかった。



⑨正面に「女神の像」設置【1952年～1957年】

1952年6月、鳥取県の医師、伊藤博氏が4年がかりで制作した「女神の像」が贈られ、納骨堂の正面に据えられた。高橋文生氏撮影(大琉球写真帖関係写真:那覇市歴史博物館提供)



⑩新しい「ひめゆりの塔」【1957年～1974年】

1957年、納骨堂を白いコンクリートで被い、新しい刻銘板と玉那覇正吉氏制作のゆりのレリーフが取り付けられた「ひめゆりの塔」が建立された。最初の「ひめゆりの塔」は納骨堂の正面から取り出され、その横に設置された。



⑪刻銘板をみかげ石に【1974年～2009年】

「ひめゆりの塔」の刻銘板が摩耗していたため、新たにみかげ石の刻銘板が取り付けられた。翌年には、献花台もコンクリートからみかげ石に変わり、大嶺政寛氏制作のゆりの校章の彫刻が施された。



⑫新装された「ひめゆりの塔」【2009年～】

「ひめゆりの塔」の劣化が進んだため、大理石で全体を被い、ゆりのレリーフの型を取って耐久性のあるブロンズ製に新装した(西村貞雄氏制作)。新しく作り直されたみかげ石の刻銘板には、ひめゆり学徒・教師227名全員の名前が刻まれた。



ひめゆり研究ノート⑩



引率教師の実像(1) —内田文彦先生

2015年12月から、戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」を開催している。ひめゆり学徒隊を引率した18人の教師たちは、刻々と変わる戦況下で生徒が次々と命を落としていく中、迷い、苦悩し、最終的に13人が命を落とした。教師たちが苦悩したその姿、実像を伝えようというのが今回の特別展の目的である。本稿では、亡くなった教師たちの実像について紹介することで、当時の教師たちの考えや果たした役割などについて改めて考える契機としたい。

この号では、沖縄師範学校女子部の助教授内田文彦先生について紹介する。

1. 戦前

内田文彦先生は、栃木県宇都宮市出身で父も兄弟も軍人という一家で育った。本人は体が弱かったため、軍人ではなく教育者になったという。大学卒業後、1943年に23歳で沖縄師範学校女子部に赴任した。「女子ばかりの学校の中で、上級生にからかわれるとすぐ顔を真っ赤にする純情な坊ちゃん先生」だったそうだ。教育原理が担当で、主として女子部本科生の授業を受け持っていた。丁寧に分かりやすい授業だと生徒の評判もよく、学級担任としても生徒たちと信頼関係を築き、教育者としての充実感を覚えていたようだ。しかし、沖縄戦が近づくにつれ、沖縄の状況は変わっていった。生徒たちも陣地構築や飛行場整備、食糧増産などの作業に追われ、授業日数も減少していく。さらに1944年の十・十空襲をきっかけに、



右端が内田文彦先生 1943年

女性教師や生徒たちのなかにも疎開（あるいは帰郷）する人が出てきた。しかし、当時学校当局は師範生の疎開に消極的だった。沖縄師範学校の野田貞雄校長は「(前略)しかるに現状は有能の女子の県外疎開者もあり寒心に堪えない特に自己身の事情を口実に逃げ出す女教員の多い事は慨嘆に堪えない(後略)」¹と新聞紙上で発言している。

本科2年の喜納和子(旧姓屋宜)は、家族との疎開を希望したが、女子部長や寄宿舎の舎監長に申し出てもなかなか許可が下りず迷っていた。担任の内田先生や島袋盛輝先生に相談すると、「学校は生命までは預かってはいない、家族が連れて行くというなら、いっしょに行きなさい」と疎開を勧められ、さらに家族宛の手紙(遺書)を託された。喜納和子と同学年の新垣政子(旧姓又吉)も、父が何度も学校に通い疎開許可を申し出たが許可が下りなかった。迷う父に、島袋盛輝先生は疎開を促し、内田先生も「絶対に連れて行きなさい。ここでは生命の保証はできないから、連れて行きなさい。自分も後から帰るから」と告げた。そのため新垣の父は娘を疎開させる決心をしたという。

内田先生自身も沖縄戦直前の1945年1月頃、栃木へ帰郷するため何度も空港に通ったが叶わなかった。本科1年の謝花澄子(旧姓喜喜屋)は、空港で会った内田先生の様子をこう記している。

(前略)師範の内田文彦教授も、小さいトランクを下げて飛行場通いをしていました。この先生は栃木県の方で哲学の教師、お父さんが将官級とかで、二人兄弟のうち、弟さん²はすでに戦死なさったとのこと、それでお父さんの方から沖縄を引揚げるようにとの連絡があり、飛行機に乗る手筈もつけた、と思うのですが、おとなしい方なので、割込んで乗ることもせず、私たちが飛行機に乗れた日も、「君たちは乗れてうらやましいなあ」とおっしゃりながらトボトボと引返しました。その後姿が今でも残っています

(謝花澄子「対馬丸で疎開した弟の生死確かめるため疎開」『那覇市史 資料篇第2巻中の6』)

2. 戦中

結局内田先生は栃木には帰れず、1945年3月23日、引率教師のひとりとして沖縄陸軍病院に向かった。数日後、動員に遅れた首里在住の生徒たちを師範学校男子部まで迎えに行った際には、「艦砲射撃にガタガタ震えており、私たちは地元で死ぬからいいけど、この先生はかわいそうだねと思った」と本科1年瑞慶覧初枝(旧姓名嘉山)証言している。

当初は作業班引率だったが、負傷兵増加に伴う病院再編成後は与那嶺松助先生とともに第二外科の引率となった。生き残った与那嶺先生は沖縄戦について多くを語らず、内田先生は亡くなってしまったため、第二外科の引率教師の詳細な様子は分かっていない。

6月18日、南部撤退後に入っていた糸洲第二外科壕が馬乗り攻撃を受けた後、2人は生徒を壕から脱出させ、伊原第一外科壕に向かわせる。2人も生徒に遅れて到着するが、すでに解散命令が出された後だった。本科2年石川幸子(旧姓玉那覇)は、壕脱出後にアダンの見える海岸を目指しているとき、内田先生を見かけ声をかけた。「僕は駄目だから行きなさい」と言われ離れたという。その後内田先生は喜屋武海岸にたどり着く。

内田先生は、「師範生は捕虜になってはいけない」³と、日本兵に自分と生徒の銃殺を依頼したり、海に入って死のうと生徒たちに持ちかけたり、また、持っていた青酸カリを飲んだり、自決を主張し、実際に試みていた。その後、与那嶺先生一行と合流し、国頭突破を主張する与那嶺先生と自決を主張する内田先生で意見が分かれ、ほとんどの生徒は与那嶺先生についていくことを決めその場を後にする。これ以降、内田先生のお消息は不明である。

自動小銃がヒューヒューと目前をかすめていきます。しばらくして内田先生が、「今晚、海に入って自決する。僕について来る者はいないか」と言うような話だったと思います。みんな黙して語りません。でも、皆わかっているんです。残された道は死だけだと……。みんな覚悟を決めていたと思います。先生は奉公袋から写真やお金、貴重品等を破っておられたんです。

本科1年 照屋信子(旧姓 金城)⁴

私は、内田先生のグループは銃殺と決まった、と言っていたがどうなったか気になって、私達の

所と背中合わせになっているので、行ってみると皆岩にもたれ、神妙な顔をして座っているんです。「引き金引くのは友軍の兵隊に頼んである」と内田先生は言っていました。「死ぬのはいつでもできるから私達は国頭突破するのよ」と言ったら、「私も国頭突破しよう」と我那覇文子さんや、比嘉園子さんだっただと思いましたが、賛成しました。(中略)出ていく時に内田先生が岩の側に立っていらっやいました。「僕ひとり残すのか」という内田先生の声が今でも、耳に残っているのです。予科3年 北城良子(旧姓 大兼久)⁵

沖縄戦直前、喜納和子に託した家族宛の手紙(遺書)には、「軍人の息子として恥ずかしくない死に方をするため、青酸カリを用意してあります。どうぞ御安心ください」と書かれていたという。

3. まとめ

戦場で自決を強く主張した内田先生の姿は、懸命に学級経営に精を出し、生徒に慕われていた内田先生像とは結びつかない。彼をそのような行動に駆り立てたのは、一体何だったのだろうか。当時の軍国主義思想や軍人一家に育ったという生い立ちだけではなく、沖縄戦という異常な状況下において希望も見えず、絶望感にかられていたのかもしれない。彼は「ひめゆり学徒隊の引率教師」であると同時に、教育者を志し道半ばにあった25歳の新米教師だった。夢を絶たれたという意味で言えば、生徒たちと何ら変わりのない、ひとりの青年だったのである。

若い一教師の実像は、私たちに改めて戦争の悲惨さと理不尽さを伝えるものとなっている。

(学芸課 前泊克美)

〔参考文献等〕

- 『墓碑銘一亡き師・友に捧ぐ一』(ひめゆり平和祈念資料館, 2014)
- 『那覇市史 資料篇第2巻中の6』(那覇市役所, 1974)
- 『戦争と平和のはざま—相思樹会員の軌跡—』(ひめゆり同窓会相思樹会, 1998)
- ひめゆり平和祈念資料館蔵「ひめゆり沖縄戦資料集」
- 内田文彦の手紙(1944年4月22日付)

- 1 「戦前沖縄如何に在るべきか(上) 叩き直せ心構へ 官吏も県民も三思せよ 野田校長と一問一答」昭和二〇年二月二七日二面 沖縄新報
- 2 内田文彦先生と双子の武彦さんのことだと思われる
- 3 伊波園子「ひめゆり沖縄戦資料集」による
- 4,5 照屋信子、北城良子の証言は、いずれも「ひめゆり沖縄戦資料集」より抜粋(読みやすさを考慮し改行等の調整を行った)

仲宗根政善日記抄(54)

〔1980年〕四月九日つづき

先日、平良邦子さんと長浜数子さんが久しぶりに訪ねて来た。長浜さんが、宮古から来たというので、二人でつれ立って来たのであった。長浜さんが雨がふっているのに、わざわざ来間島まで渡り、島の古老具志堅真津さんに、私の消息を伝えてくれたらしい。具志堅さんは感激した。玄関で立話をして別れ、お茶もあげず、名前を聞くのも忘れたという。去ってからしばらくして雨が降り出したので、気がかりになり、浜まで急いでおっかけた。船は荒波をおしきってもう与那覇の海岸についていたという。何という方だろうか、具志堅さんからお手紙があった。

長浜さんでしたかと、確かめたらそうでしたという。宮古の歌謡やことばは、決してあの美しい宮古の人々の心とはなれては存在しない。宮古を研究するなら、その根っこのところに心をむける必要があるなどと、三名で話し合った。

石牟礼道子さんが、先生のことを書いていますよと、平良さんが言っていた。新沖縄文学に41号でしたが、本土の女性の沖縄についての感想文を書いていて、曾野綾子さんや高岡敏子さん溝淵泰子さんが、ちょっと私のことにふれていたことを記憶していたが、石牟礼さんとは久高でお会いしたが、別にふれているようにもなかったので聞き流した。

仲程昌徳君から、石牟礼さんの椿の海の記をすすめられて、読んで感銘したので、二人にも買ってあげてを約束した。

今日ふと、新沖縄文学の新聞広告を見ると、石牟礼道子さんの、「陽のかなしみ」があるのに気がついて、とり出して読んだら、私のことがこまごまとオーバー気味に書いてある。美しい文である。イザイホーのとき、たまたま、私だちのとまっていたアガリヤーに色川大吉氏といっしょに訪ねて来られて、夕食をともにしながら話した。そのときのことを書いてある。

〔1980年〕四月十日

「太陽の子」が今度映画化される。浦山桐郎氏から、そのシナリオを送ってあった。一見しただけで、読まなかった。後で読みかえして見ると、こんなところがあった。

下士官「貴様は通信隊の学生だな。後でしらべあげる。(喜納に)お前はどこの隊か」

喜納「白百合隊です」

下士官「こっちへ来い」

下士官彼女の腕をつかんで、ひったててゆく。立ち上がれなくなった直夫、這うようにして起き上る。

二人は密林の中に消えた。

彼女の悲鳴と絶叫がきこえる。

喜納「いや!ゆるして・・・」

暗い中で、陵辱されている、女学生を、助けることが出来ない、直夫。顔がゆがむ。

こんな場面のあることに気がついた。さっそく高江洲君を呼んで、その場面をとりのぞくように抗議した。渡久地政一氏と高江洲氏が家まで来てくれた。時がたつにつれて、ひめゆりの乙女たちの戦時中の行動を裏からあばこうとする傾向が出て来ている。私が書いた沖縄の悲劇などは表向きのきれいごとで、醜悪な事実が裏にはいくらもかくされているにちがいない、それをえぐり出して、読者や観覧者の好奇心をそそろうというのである。

「逃げる兵隊」などには、ひどいことを書いてある。全くでたらめもはなはだしい。十九日解散を命ぜられた生徒たちは、ほとんど喜屋武摩文仁で捕虜になっており、西原へんまでおちのびた生徒などはいはしない。読者の好奇心をそそるため事実をねつぞうしている。乙女らの純潔をきずつけることおびただしい。何かとひめゆりの乙女たちと結びつけて、世の人々の注意をひこうとしている。そういうことに抗議をすとかえって逆効果をもたらすので、憤りをかみこなしていた。

「太陽の子」のあの場面をみて、一体肉親の方々がどんな思いをするであろうか。フィクションと

は言いながら、あまりに遺族たちの悲しみを無視している。

戦時中、獣欲にうえた兵隊に生徒がおびやかされた例はあるにはある。座波千代子は、正直に告白し、私が聞き書きして、「沖縄の悲劇」にも入れた。しかしこの記事が誤解をまねきつつあることに狼狽した。読者はああいうことがざらにあったにちがいないと想像を逞しうしているからである。特殊なことがあるとすぐ一般〔化〕しようとする。うっかり書けるのものではないかと反省もさせられた。座波千代子は、ああいうことを書いたので、かえって自らの潔白をうたがわれはしなかったかと悩むようになった。家を出る時の母のこぼしを身にしめて、すきみきった敗残兵どもの中にいて、正しく身を処したのである。

生徒たちのこうした強さを描こうとせず、悲鳴をあげ絶叫するところを出そうとしている。乙女だちはいい加減な素材につかわれている。

ひめゆりの乙女だちは、空想のものではない。現実に生きそうして死んで行ったのである。遺族たちはまだ娘らの生きて帰ることを待ってすらいる。兵にもてあそばれている場面はみるにしのびない。娘らが美しく死んで行ったと思ひ込み、そう念じているにちがいない。そうあらしめたい。なくなった生徒たちの行動をすこしでもまげてつたえることは、罪悪でさえある。

昨日、高江洲さんから、沖縄のロケを終って、プロデューサーがわざわざ訪ねて来て、あの場面は命からがら逃げ帰って来るということにしたとの電話があった。私としては、全部カットしてもらいたかった。

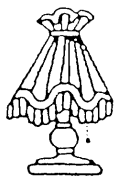
生徒たちのカバンの中に、最後まで持ちつづけていたのに、親兄弟の写真と教生実習録があった。最後の装いのために制服も皆が大切に持っていた。

教生実習録を持っていたことには、私は戦時中は気がつかなかったが、戦後生き残りの生徒から聞いてはじめて知った。

付属訓導は、当時、県下のもっとも優秀な者が、各地区から推薦されて来ていた。本校での詰めこみの授業とはちがいで、教生たちは学童一人一人を前にして、自分をむき出しにするのである。校訓も師弟一心で、行を主にして教育がすすめられており、教生たちも生徒といっしょに雑巾がけもした。一日一日の実行したこと、その反省の記録が実習録であった。訓導はあかりがつかなければ、訓導気分はしないと書いていた。教生たちも遅くまで教室に残って実習録を書き終ってから寄宿舎に帰った。訓導も教生もはりつめていた。こうして書いた実習録を死ぬまぎわまで持ち歩いていたのである。単に知識を与えるというのではなく、危機に直面しての心のふれあいがあった。戦争といういまわしいものに直面してのことではあった。平和に対して、どうしてわれわれは、そうした切実さを持ちえないのか。今、平和は危機にひんしている。世界が決して、われわれの念願している方向へむかっているとは思えない。米国のイランへの報復手段に、日本も同調し、世界の平和をおびやかそうとしている。強いものにまかれてあらぬ方向へとすすみつつある。教える者も教えられるものも、今世界のすすみつつある方向に、危機を感じ、緊張を感じなければならない。人間の本念が燃えなければならない時機である。学力の問題は、その本念のもえさからないところに最大の原因がある。平和を生み出す根源の力が、われわれにはかけている。平和教材をただたくみに教えるのでは、平和教育は何の実も結ばないであろう。

沖縄の負いつづけている重圧を重圧と感じこれをはねのける力が生れて来なければならない。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。〔 〕は編集で補った。旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。



本棚

仲程 昌徳

浅井春夫『沖縄戦と孤児院 戦場の子どもたち』

野坂昭如の「火垂るの墓」は、神戸空襲で焼け出され、やむなく洞窟をねぐらにした兄妹の物語で、やがてそれぞれが落ちいて行く栄養失調による無残この上ない死は、戦争が、いかに孤児たちを犠牲にしてしまうかを鮮明に照らし出していた。

野坂には、同じく、孤児の死を描いた作品で「ウミガメと少年」「石のラジオ」があった。二編は「戦争童話集 沖縄編」と記してあるように、沖縄戦で亡くなった戦争孤児を扱ったものであった。野坂のこれら三篇は、期せずして洞窟・ガマを孤児たちの避難場所に設定していたが、そのように、戦場の片隅でなくなっていったものたちだけでなく、戦場を生き延び、施設に収容されながらなくなっていった孤児たちも数多くいた。

百名の収容所に収容されていた「孤児たちを孤児院に移す」ことになって佐久川ツル、豊里マサエ、岸本ヒサたち——「ひめゆり学徒隊」の一員として戦場に出て、運よく生き残ることが出来て百名に収容されていた——は、「孤児十五、六人」とともにコザに向かう。彼女たちが、そこで接したのは、あまりに幼くて、話もできないような子どもたちであり、着る物も十分になく、裸に近い状態の子どもたちであり、「頭から足まで糞べんまみれ」(本村つる)の子どもたちであった。そして彼女たちが見たのは「毎朝、ひとりふたりと冷たくなり、亡くなっていく」(津波古ヒサ)子どもたちであった。

砲弾の吹きすさぶ中を生き残り、収容所に収容されながら、亡くなっていった子どもたちが数多くいたのである。そしてそれは、沖縄戦の前に、玉砕を伝えられたサイパン、テニアンでも起こっていたことからすると、孤児たちの問題は、二の次だと見られたのであろう。孤児や孤児たちを収容した孤児院に関して、これまで、ほとんど省みられてこなかったことにもそれは現れていた。

もちろん孤児に関する調査・研究ノート、報告類がなかったわけではない。サイパンの孤児たちに関していえば、佐々木末子の「調査ノート サイパン孤児院」があったし、沖縄のそれについては上原正稔の「戦争を生き残った者の記録」のなかの「児童福祉」の項、謝花直美の『戦場の童——沖縄戦の孤児たち

——』、古賀徳子の「ひめゆり研究ノート コザ孤児院とコザ第4小学校」などがあつた。そのように、ある程度、調査や報告がなされていたが、孤児院についての本格的な研究といえるものではなく、やっとならその研究成果を問う著書が登場してきたのである。

本書は、五つの章からなる。「本書の意義」を著者自身が五点あげていた。それによると、孤児院について「全般的に整理したもの」であること、「孤児院の状況を把握することができる内容になっている」こと、沖縄の孤児院の前史とについていい「サイパン孤児院」について「新たな史料に基づいて論じている」こと、「孤児院の従事者の実像について」論述していること、「戦後直後の社会福祉・児童福祉史の空白の時期を埋める歴史の書」であるという。同時に、孤児院に関して、実に多くの資料が不明であり、その発掘が今後の課題であるとも述べていた。

これまで空白といえた孤児院の調査を踏まえて、著者は、孤児院での衰弱死は「アメリカ占領軍が子どもの生命保持を一義的に占領政策で位置づけていれば」免れていたにちがいないこと、さらに子どもたちの衰弱死に関する統計資料が見当たらないのは「施策の怠慢を物語っている」といった米軍政の批判をするだけでなく、戦争孤児を大量に生み出したのは、日本軍の「軍官民共生共死ノ一体化」にあつたとする。そして、孤児院研究は、「戦争の本質を捉える研究でもある」という。

本書の読者は、いくつもの未知の記述に目を見張る思いをするに違いない。とりわけ「慰安婦」が「孤児院従事者として存在していた事実」の指摘には驚きを新たにするのはなかろうか。さらにまた、そのような事実が「意図的に闇に葬られた」のではないかという推論に、若い研究者は、解明への意欲をかきたてられることであろう。

著者は、「孤児院研究には多くのミステリーがある」といい、史料が見当たらないことを何度も強調していた。そしてそれは、占領軍の故意による消滅ではないかと考えるのだが、史料の不明というハンディーを乗り越え、多くの成果を上げた一書になっていた。

声

資料館のノートに書き残した約束

大阪府 丹治智子

ひめゆり平和祈念資料館の皆様へ

この手紙を、関係者の方の内、どなた様でも構いませんので、目を通して頂けるだけで幸いと思いがらしたためています。

私は、1990年4月(多分25日頃)に、資料館を訪れた者でございます。その時、私は25才で、2歳になったばかりの長男がおりましたが、長男を親に預けて、初めて沖縄一周のツアー旅行に参加した際の観光でした。そして資料館の中で、若い女性達が大勢、悲しい最期を迎えられたことを知りました。出口近くの来館者ノートには、「楽しいことを沢山経験出来る筈の10代の少女達がこんなに辛い思いをされているのを知り、涙が出ました。今、我が家には息子しかおりませんが、もし、女の子を授かることがあれば、ひめゆりの皆様のことを1日も忘れずに、大切に大切に育てようと思います」という様な内容を記して帰ったのを記憶してございます。それから2年後の1992年2月に、長女が誕生致しました。娘は、御腹にいる間、いつ流産してもおかしくない状態だったので、2ヶ月半程ほぼ寝た切りで過ごしましたが、夏に私の祖父が亡くなってからは嘘の様に安定し、無事に誕生しました。その娘が、高校の修学旅行で宮古島に行き、そこで沖縄民謡のエイサーを観て感動し、自分でエイサーの京都支部を訪ねて仲間入りをした時は驚きました。特に娘にはひめゆりの話を伝えたこともなく、ただ1度だけ、2000年8月上旬に私が1人で子供達を連れて沖縄に二泊三日の旅行へ出掛けた際には、まさかの台風直撃観光バスもタクシーも走らず、那覇のダイエー店内で時間をつぶしたり土産店をうろうろしたりで、ひめゆりの塔には行けずじまいだったことはありました。その時に御礼参りが出来なかった心残りをずっと抱えておりましたが、やっと今回(2016、8、末)、当の娘本人が、エイサーの御友達と御一緒させて頂きまして、ひめゆり平和祈念資料館を訪れるはこびとなりました。残念ながら私は同行出来ませんが、大阪の空の下より、娘を授かせて頂きました感謝の祈りを捧げさせて頂きます。娘には、ひめゆり戦没者の御嬢様方の無念の分迄、美味しい物を与え、遊ばせ、学を全うさせ、成人させました。保護者として、片親にはなりましたが、26年前に資料館のノートに書き残した約束を守り続ける所存でございます。どうか関係者の皆様、御体大切になさって、ひめゆりの乙女達の幸せを守って差し上げて下さいませ…

有難うございました。

2016. 8. 25

資料館ガイド

◆千羽鶴再生紙のストラップ

ひめゆりの塔へ捧げられた千羽鶴を再生紙として活用し、沖縄の伝統文化をモチーフにした手作りのストラップが完成しました。
(各 350 円)



カーサームーチ(鬼餅)、シーサー、しまぞうり、サンダァー

◆平和講話・証言ビデオ・アニメ視聴ご案内

当館多目的ホールでは、ひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話(約45分)、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。下記の時間でご予約下さい。

【講話】 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00

【ビデオ】 9:10 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールにて申込書をお送り下さい。

※ビデオ作品 ○証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分)

○アニメ「ひめゆり」(30分)

※毎週月曜日・年末年始(12月30日、31日、1月1日～3日)・旧盆(旧暦7月13日～16日)は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後(6月21日～24日)は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

●最大収容人員:200人(席)

●資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。

●多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的(セレモニー等)には利用できません。

●予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせて頂くこともございます。

◆VTR室のご利用について

下記のビデオを視聴することができます。

- ◇「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分 1994年)
- ◇アニメ「ひめゆり」(30分 2012年)
- ◇「ひめゆり学徒の戦後」(33分 2003年)
- ◇「仲宗根政善～浄魂を抱いた生涯」(30分 2001年)
- ◇「戦火に消えた21の学園」(26分 1999年)
- ◇「生き残ったひめゆり学徒たち」(28分 2012年)



多目的ホール

◆資料館ご利用案内

①入館受付 午前9時～午後5時(閉館は午後5時25分) ②休館日 年中無休

③入館料 大人¥310 高校生¥210 小・中学生¥110
団体料金(20名以上) 大人¥280 高校生¥190 小・中学生¥100

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第58号

2016(平成28)年11月30日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

☎ 901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎ 098-997-2100

URL <http://www.himeyuri.or.jp/>